

■（１６０）継続を誓い、再び被災地から発信します

オウム真理教事件で、刑事裁判の一審判決が、地下鉄サリン事件の発生から２０年目の３月に出される。長年にわたって逃亡していた被告の裁判とはいえ、こんなに長期間にわたるとは当初は誰も想像していなかったのだろう。審理を伝える記事の署名から思う。

朝日新聞の記事「オウム法廷」の筆者は「元朝日新聞編集委員」。定年でＯＢとなった元記者が新聞でワッペン付きの記事を書き、署名を入れるのは異例だ。このシリーズの初回は地下鉄サリン事件から５カ月後の１９９５年８月１６日朝刊だった。文章力が特に優れている編集委員が１人で担当した。初回の末尾で「私たちの国、私たちの社会、私たちの時代に、この一連の事件が起きた。そのことが、戦後五十年を迎えたこの日、私たちの上にさらに重くのしかかってくる。その意味をこれから本格化する『オウム法廷』を通じて考えたい」と狙いを書いた。それから１６年余りして、署名の肩書に「元」が付いた。

同じ記者が継続取材すると、小さな変化も見えてくる。その姿勢は東日本大震災取材にも引き継がれている。その一翼を担いたいとの思いを抱え、４月、被災地に戻る。(山)